

多くの釣り人の訪れ

■マハゼ釣りの人々

曇り空ではあるが、連日の雨が上がり蒲生干潟には多くの釣り人が訪れていた（Fig.1）。バケツの中をのぞかせてもらえると、10cm程度のマハゼやコトヒキを釣り上げていた。震災前の蒲生干潟には多くの釣り人がマハゼを狙って訪れていたが、震災後しばらくは見られなかった。堤防等の工事も終わり、多くの人に「魚釣りをする場所」として再認識されたのであろう。また、釣り人が集まるということは、釣って楽しめるほどマハゼの数も存在するのだろう。



(Fig.1 多くの釣り人)

■気温が低く、生物の活動は不活発

今回の調査は20℃程度で、連日の暑さから気温が低下した日であった。カニ等の生物の活動も不活発であったが、干潟でしゃがみ動かずに待っていると、巣穴から出てくるカニを観察できた。摂餌はするが、ウェビングは見られなかった。



(Fig.2 カワザンショウガイのなかま)



(Fig.3 水中のアシハラガニ)



(Fig.4 ウミニナのなかま)



(Fig.5 巣穴から出ようとするコマツキガニ)

(佐藤 賢治)